

# 「アルプスの少女ハイジ」再読

～登場人物の癒しという視点から～

太田裕一（福井大学 保健管理センター）

氏家靖浩（福井大学 教育地域科学部附属教育実践総合センター）

## Reviewing “ Heidi ” in View of Psychological Healing

Yuichi Ota( Health Management Center, Fukui University )

Yasuhiro Ujiie

( Integrated Research Center for Educational Practice Faculty of Educational and Regional Sciences, Fukui University )

### 1 . はじめに

#### 1 - 1 . 「ハイジ」 3度目のブーム

「ハイジ」は、スイスの作家ヨハンナ・シュピーリ Johanna Spyri の代表作である。物語の前半部分は1880年に「ハイジの修業時代と遍歴時代」として独立した物語として出版されたが、これが好評だったために翌年に続編の「ハイジは習ったことができる」が書かれた。現在「ハイジ」として出版されたのはこの2編をあわせたものである。しかし日本人にとっては、1974年に放映されたアニメーション「アルプスの少女ハイジ」の原作という印象が強いのではないだろうか。「アルプスの少女ハイジ」は演出・高畑勲、場面構成・宮崎駿という豪華なコンビで、日本はもとより世界中で放送されて人気を得た。バンダイが行った「子供にみせたいなつかしのアニメ」調査では、男女児それぞれ1位となっている。デルフリ村のモデルとなったマイエンフェルトは観光の名所となり、多くの日本人が訪れ、現地にはハイジがアルムおんじとすごした山小屋が再現されている。2000年にはインターネット上でアニメ作品としてのリメイク企画も公表された。2001年はシュピーリの没後百周年記念だったこともあって、ビデオ・コレクションの通信販売が行われ、雑誌 MOE2001年 6月号で特集「『アルプスの少女ハイジ』は永遠に 幸せのヒントはここにある」が掲載されたり、雪印CMのキャラクターに起用されたりするなどリバイバル・ブームとなった。原作発表の時を第1次、アニメ放映時を第2次の「ハイジ」ブームとすれば、現在は第3次「ハイジ」ブームのただ中にあると言っていいだろう。

#### 1 - 2 . アニメの「ハイジ」のイメージ

私たちの「ハイジ」のイメージは第2次ブームのアニメ版「ハイジ」によって形作られている。

ではこのアニメ版「ハイジ」の魅力とは何なのだろうか？アニメのビデオ・コレクションの通信販売広告（朝日新聞2002年8月24日号）のキャッチコピーを見てみると、「気分爽快」「みんな幸せ!!あなたも幸せ!!」とハッピーなイメージが強調されている。またセールスポイントとしては「青い空、白い雲、色鮮やかなアルプスの大自然、そして純真で快活で心優しいハイジがあなたを待っています」とアルプスの大自然とハイジのキャラクター設定があげられている。

日本ではアニメ化された1974年の頃は、公害問題で日本が揺れた時期であることもあり、「自然による癒し」というテーマは、このアニメを見た人の心に焼き付いている。工業化した日本はハイジがホームシックにかかってしまうフランクフルトに重ねられ、自然の中のアルムの山々がオアシスとして郷愁を誘うのである。

### 1 - 3 . 原作「ハイジ」

しかし原作を読み直してみると、「ハイジ」という物語がそうハッピーな物語でないことが分かる。以下に原作のあらすじをあげてみる。（特に出身人物の生育歴に焦点をあて再構成してある。）

ハイジの祖父アルムおんじの両親はドムレシュクの大農場の持ち主だったが、おんじが博打で借金を作ってしまう、農場も借金の形に手放すことになった。それが原因で両親は死んでしまい、弟も乞食同然になり行方しれずになってしまった。おんじは放浪の後、ナポリで兵隊になる。

その後、おんじは喧嘩から人を殺して軍隊から脱走し、15年ほど行方をくらませていた。久しぶりに故郷のドムレシュクに、かなり大きくなった息子トービウスを連れて現れた。おんじはトービウスを親戚に預けようとしたが断られ、デルフリ村で暮らすようになった。妻はグラウペンデン州の女性だったが、結婚してすぐに亡くなったようだった。トービウスは大工になり、村娘のアーデルハイトと結婚し、娘ハイジ（アーデルハイト）を設けた。しかしトービウスは仕事中の事故で死に、アーデルハイトも夫の死のショックから高熱を出し、2、3週間後に亡くなってしまった。このように不幸が続くのは、おんじの悪行の報いだと村人は責め、牧師も懺悔を迫るが、おんじはますます不機嫌になり、ある日デルフリ村を去り、アルムの山の上に引っ越してしまった。年に1度山から降りてくるときは、村人たちは恐れて近づかないのだった。

両親を亡くしたハイジは祖母とおばさんのデーテにひきとられた。デーテが仕事でフランクフルトに働きに行くために、5歳になったハイジをアルムおんじのもとに預けていく。アルムの自然の中でハイジはおんじにもかわいがられ、羊飼いのペーターとともに毎日の生活を楽しんだ。ペーターの父親は事故でなくなっていて、母親と目の見えない祖母と3人暮らした。ハイジはペーターの祖母を慰め励まし、ハイジに頼まれておんじもペーターの家の普請をなおして感謝されるのだった。ある日、デーテが山に現れ、フランクフルトの裕福な商人のゼーゼマン家にハイジを預けるといって連れて行ってしまふ。ゼーゼマン家の奥さんは早くに亡くなり、ロッテン

マイヤ女史が家の中のことは任されていた。主人のゼーゼマンは仕事が忙しく長期に家を離れることが多かった。一人娘のクララは病弱で片足が麻痺しており車椅子の生活だった。ハイジはクララの相手をするが、学校にも行かず、上流階級の生き方がわからないハイジの行動は、頭の固いロッテンマイヤ女史を怒らせてばかりだった。ハイジはクララの祖母にキリスト教の信仰と文字を教わり、クララとも仲良くなった。クララの祖母がフランクフルトを離れ、アルムに帰りたい気持ちをロッテンマイヤ女史に責められ、ハイジは夢遊病になって夜な夜なゼーゼマン家のあるきまわり幽霊に間違えられる。ゼーゼマンとお医者様がハイジが夢遊病になっていたことをつきとめ、お医者様の薦めでハイジはアルムに戻ることになる。翌年、アルムを訪れたクララはおじいさんの介護によって、再び歩けるようになった。

「ハイジ」には外傷体験とその癒しというモチーフが繰り返されている。おんじ、ハイジ、クララ、ゼーゼマン、ペーター、お医者様といった登場人物のほとんどが家族を突然失う体験をしている。そしてその喪失体験の癒しは、原作では明らかに宗教的な信仰によって得られている。ハイジがホームシックを克服するには、クララの祖母から教えられて信仰が大きな役目を果たすことになる。（アニメでは宗教的なエピソードはカットされている）信仰を捨て、人を殺め、他人を信じず一人暮らしていたおんじが、ハイジとの出会いをきっかけに信仰にめざめ、再び村人から受け入れられるようになるのである。

#### 1 - 4 . 「ハイジ」と癒し

最近のハイジブームは、「癒し」志向と結びついた、現代的な視点から読み直しの試みが含まれているようである。「癒し」という視点はアニメでは隠されていた「こころの傷」という問題を浮かび上がらせる。

矢川（2001）は、ハイジ、クララ、ペーターなど登場する子どもたちがすべて片親を亡くしていることを、現代のシングルペアレントの増加にたとえた。また、クララの歩行困難を心因性のものととらえ、癒しの物語としてハイジを再解釈している。

前述のアニメーションのリメイク企画にも興味深い記述がある。

それは、心の深部に問いかける現代人の忘れ物…。孤児となりながらも天真爛漫に生きるハイジ、そのハイジに勇気づけられ心の病に立ち向かうクララ。

「こころの病」といえば、クララだけでなく、ハイジもアルムの山を離れ、フランクフルトで暮らすうちにホームシックから夢遊病となってしまう。

このような企画が進行した理由は、単にシュペーリの没後百周年というだけでなく、1997年の神戸連続児童殺傷事件以来続く少年犯罪によって「無邪気で」「純粋な」子どもイメージが失わ

れてしまったことも関係しているように思える。「ハリー・ポッター」や「ハイジ」に子どもだけでなく、大人までが惹かれるには、このように傷ついた子どもイメージをどこかで癒すことが必要とされているからかもしれない。

ともかく、クララの足の麻痺も、ハイジの夢遊病も「こころの病」と捕らえることで、物語を読み直すことができるだろう。しかもその「こころの病」は物語の書かれた19世紀末という時代を代表するような精神疾患「ヒステリー」であった。本論文では「ヒステリー」をキーワードに「ハイジ」を再読し、仮想的にヒステリーの症例として扱いながら、その時代背景の中での「癒し」の意味について考察したい。

## 2. 作者ヨハンナ・シュピーリ

まず、作者シュピーリの生涯を主に高橋(1972)の伝記を中心にまとめておく。

### 2-1. 幼年期～少女時代

ヨハンナ・ホイサーは1827年6月12日、スイスのドイツ語地方、チューリヒ州ヒルツェルに生まれた。ヒルツェルはチューリヒ湖の南岸に近いドイツ語圏の山村であり、同じチューリヒ州とはいえ、この時代チューリヒからたどりつくには7時間はかかったという。7人同胞の1人は出産直後に亡くなり、成長した男2人、女4人のきょうだいのうちの第4子(次女)。父のヨハン・ホイサーは苦勞して医学を修め無医村だったヒルツェルで診療所を開業した。内科、外科はもとより精神疾患をもつ患者も静養にきており、食事を一緒にとり、妻と子どもたちが世話をすることもあったという。シュピーリの初期短編「彼らの一人をも忘れず(1873)」では、8歳の少女ネリーが、父の診療所に入院している精神病の女患者の散歩相手になるというエピソードが描かれている。

母のアナ・マルガリータ・ホイサー(旧姓シュバイツァー)はヒルツェルの牧師の娘であり、愛称のメタの名前でキリスト教の宗教詩人として有名である。

1841年、ヨハンナは14歳で故郷を離れ、教師となるためにフランス語とピアノを学ぶ。最初の3年を首都チューリヒ、最後の1年をフランス語圏のイヴェルドンで過ごす。チューリヒで歴史小説家であるコンラッド・フェルディナント・マイヤーと出会う。マイヤーは生涯神経症に悩んでいたという。1843年、16歳で新教の堅信式を受けた。18歳でヒルツェルに戻り、妹たちに勉強を教えた。文学を愛し、ゲーテや女流詩人のアネット・フォン・ドロテス・ヒュルスホフらに傾倒した。

### 2-2. 結婚と作家生活

1852年、25歳の時、兄の友人で以前からしばしばヒルツェルを訪れたことのあった、弁護士で「スイス連邦新聞」の編集長であった30歳のヨハン・ベルンハルト・シュピーリと結婚し、チューリヒ市中心部のシュタデルホーフェンのアパートに住む。ヨハンは理想主義者でヴァグナーの

熱烈な愛好者だったという。ヨハンナは1855年に一人息子のベルンハルト・ディートヘルムの妊娠中にうつ状態となったが、信仰がヨハンナを支えた。このうつ状態は従来、ハイジのホームシックのように都市生活になれぬことから生じているという説明されてきた（高橋 1972）。しかし、ヨハンナはチューリヒでの都市生活は10代に3年間経験しているの、単に都市生活への不適応というより、それに加えて妊娠と夫ヨハンが仕事にのめり込み十分ヨハンナをサポートできなかったことの影響が大きいように思える。1868年ヨハンがチューリヒ市の官房長となり、一家は市役所の建物の中に住むようになった。1871年、44歳で処女作「フローニの墓の上の一葉」を匿名で発表。歌や空想が好きだった主人公の幼なじみのフローニーが、粗暴な大工の夫と結婚する。夫は放浪しながら賭と酒に身をもち崩し、故郷の近くに帰ってくるが、フローニーはついに耐えられなくなって、自殺を考える。教会で牧師から迷える羊と羊飼いの話を聞き、もう1度生きてみようとするが、力つきて亡くなってしまう。それから日曜ごとに教会にはこころをいれかえた彼女の夫がかよいつめるのだった。注目すべきは後の「ハイジ」に見られる「放浪するろくでなしの夫」「宗教による救い」といったモチーフがすでに現れていることである。ややマゾヒスティックにもみえるフローニーの行為は、ハイジの素直さのプロトタイプといってもよいだろう。

精神障害のテーマもヨハンナはよく取り上げていて、前述の「彼らの一人をも忘れず」（1973）では、子どもを水死させてしまったことをきっかけに精神障害になった女性を献身的に看護する女性の話が出てくる。「カンダグルトのトーニ」（1882）では、日雇い人だった父親が切り倒した木の下敷きになって死んでしまったために、主人公のトーニは木彫師になりたいという願いをあきらめて、高山の牧場の番人になる。しかし寂しい小屋にただひとり暮らしているうちに激しい雷雨に襲われ、精神的な変調を起こして、病院に入院させられてしまう。女中をしていた母親が駆けつけても、トーニは全く無表情だった。母の唱える祈りの言葉にトーニは正気を取り戻し、母と抱き合って泣く。医者と金持ちの患者の好意でトーニは木彫師に弟子入りすることができ、ハッピーエンドとなる。

1880年に現在の「ハイジ」の前半部分である「ハイジの修業時代と遍歴時代」を発表。題名には明らかにゲーテの「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」の影響が見られる。この頃、結核を患っていた息子の療養のために、マイエンフェルト近くの温泉地パートラガイエニス村に住んでいた女学校の同級生サリの家をたびたび訪問した。この地がアルムの山やデルフリ村のモデルとなった。このあたりは療養のための施設が多かったようで、ウィーン生まれの精神分析家メラニー・クラインも、結婚後の抑うつ状態の改善のためにマイエンフェルト近くのクールのレストランで療養している。

翌年読者と出版社の要望に応じて続編「ハイジは習ったことを使うことができる」を発表。

息子のベルンハルトはチューリヒで高校生活を過ごし、ライプチヒとハイデルベルクの大学で法律を修めていたが、体が弱く、大学卒業後も転地しながら療養していたが1884年5月13日、結

核のために29歳の若さで亡くなった。息子の死のショックから健康を害した夫とともにシュペーリ夫婦は避暑地エンガディーンで保養していた。その地で夫婦が住み続けた市役所の建物が取り壊されることに決まったという知らせを聴く。ヨハンにとっては市役所を失うことは耐え難い苦痛であった。体調は最悪であったが仕事への義務感から、ヨハンは仕事を続け、ついに同年12月19日、肺炎のため亡くなった。享年62歳だった。57歳で未亡人となったヨハンナは1901年7月7日、74歳で死去するまで、「子どもと子どもを愛する人たちのための物語」7冊とその他の物語を精力的に書き続けた。死の直前には原稿や手紙類はすべて焼却してしまったという。

### 3. 不在の父たち

本題のヒステリーと女性たちに入る前に、男性の登場人物、おんじ、ゼーゼマン、お医者様のたどる癒しのプロセスについて見ておきたい。

#### 3 - 1 . 放蕩息子の帰還

アニメではぼかされているおんじの生涯は、前半はその自己中心性のゆえに多くの悲劇を引き起こし、後半はそのつけをはらうかのように不運と失意がついてまわるものだった。

確かにおんじは両親の死や、軍隊での殺人、弟の失踪に対しては直接の責任がある。しかし息子夫婦の死に関しては責任がない。おんじの人生は失踪を境に、これまで棚上げされてきた罪悪感の問題に運命的にとりくまなければならないものへと変化したのだった。

Caplan (1961) は対象喪失のプロセスを 対象喪失を予期する段階 対象を失う段階 無感覚、無感動になる段階 怒り、対象を再び探し求め、対象喪失を否認するなどの試みが後退する段階

対象喪失を最終的に受容、断念する段階 対象を自分から放棄する段階 新たな対象の発見、回復の段階に分類している。自分の息子を事故で失う体験というのは の対象喪失予期の段階を欠いているだけに、よけいに受け入れがたいものだろう。突然の事故で自分にとって大切な人を失った場合、非合理的な自己非難からうつに陥ってしまう場合もよくあるようである。トーピアスは村人にも好かれていたようであるから、共同体全体でもこの不幸な事故を受け止めることは困難な課題だった。村人が、宗教的な因縁という形でおんじの不信心を責めるのは、集団心性としておんじをスケープゴート化しているとも考えられる。おんじの対象喪失を否認したいという健康な防衛反応とあいまって、怒りの対象は村人に向けられ、おんじはひとり山で暮らし始める。

もちろんこうした行動はおんじの自己中心性からも解釈できる。しかし、おんじの側に立てば関わる人に不幸をもたらしてしまう自分を隔離し、これ以上の犠牲を増やさないようにという自己処罰と、下界の人間を馬鹿にして自らを孤高の存在にすることで自分の自尊心を保とうとする試みも読むことができる。

そしてハイジとの出会いである。あらくれものだったおんじも70歳となって死を感じる時期となり、やはり孫がかわいいという気持ちが生じたのか。あるいはユング的な視点から自らのアニメ的存在としてハイジを再発見したのか、とにかくハイジの存在がおんじのこころを和らげたこ

とは確かである。

ハイジが触媒となり、おんじはがたがきたペーターの家を修理して感謝される。「誰かに必要とされ、感謝されることの重要さ」という物語を通じたテーマが、おんじの回心の伏線となっている。

おんじはハイジからルカ福音書の「放蕩息子の帰還」の話を聞かされることで、信仰に目覚め、冬の間はアルムの山を下り、デルフリ村で暮らす決意をする。もちろんおんじのエピソード自体が「放蕩息子の帰還」を念頭に書かれていることは言うまでもないだろう。

### 3 - 2 . ワーカホリックなゼーゼマン

ゼーゼマンは富裕な商人で、長期にわたってたびたび家を不在にしている。クララに対してはおみやげをたくさん買ってきたり、ロッテンマイヤ女史に「娘の嫌がることは何もしてはいけない」といったり、本人が行きたがっているからといって調子の悪かったクララに秋を過ぎてからのスイス旅行をさせようとするなど、甘やかしているところがある。

ゼーゼマン夫人はクララを生んでから亡くなっているが、死因については書かれていない。ハイジの両親はもちろん、ペーターの父親の死因も明示されているのに、同じく重要な登場人物クララの母親であるゼーゼマン夫人の死因が書かれていないのは奇妙に思える。ふか読みすぎるかもしれないが、シュペーリ夫妻の夫婦関係が重ねられているように思えてならない。シュペーリの夫ヨハンもワーカホリック気味で、一人息子ができたところにヨハンナはうつに沈み、象徴的には死ぬのである。市役所に勤務するようになってからは、昼食には戻ってきたが、新聞の束を抱えていて、食事の間にそれを読み、家族と満足に話をしないこともあったという。ユング的にいえば、このようなテーマはヨハンナのコンプレックスにふれる部分があった。だからヨハンナはゼーゼマン夫人の死因についてぼかした書き方をしたのではないか。

おんじといい、ゼーゼマンといい、また処女作の主人公の夫といい、シュペーリの物語に出てくる男性は家庭を顧みない人間が多い。この物語が書かれた後、ヨハンが息子の死というきっかけがあったにせよワーカホリックのすえに市庁舎に殉じて死んでしまうのは何とも皮肉なことである。

### 3 - 3 . お医者様の喪失体験

ハイジを夢遊病から救うお医者様には、多分にシュペーリの父親の姿が投影されているのであろう。アニメ版ではカットされてしまっているが、このお医者様は早くに妻を亡くしていたが、ゆうれい事件の後にひとり娘まで亡くしてしい、ふさぎ込んでいた。そしてクララのアルム訪問延期の知らせを伝えるために、アルムを訪れハイジと再会する。ハイジの歌ってくれた賛美歌によってこころが慰められ、少しずつ元気を取り戻すのだった。そしてフランクフルトに戻ろうとするお医者様に、ハイジは自己犠牲的にフランクフルトと一緒に帰ると提案する。妻と娘を失っ

て、お医者様に必要だったのは、誰かに求められることだったのだろう。そしてついにはお医者様は、デルフリ村に引っ越してきてハイジたちの冬の住まいに住み始めることになった。文字通りお医者様とハイジは家族となったのである。

#### 4．女性たちとヒステリー

ハイジ、クララ、ロッテンマイヤ女史の3人の登場人物にはいずれもヒステリー的な傾向が見られる。彼女たちの性格形成と癒しの考察の前に、山田(1999)、Trillat(1986)を参考にして、ヒステリーの歴史について概観しておく。

##### 4-1．ヒステリーの歴史

ヒステリー Hysteria とは古代ギリシア時代からヨーロッパ文化圏において、その時々 of 疾病感に従って、様々な形で提議されてきたが、現代優勢な疾病分類である DSM や ICD10では「神経症」などととみにすでに消滅してしまっている診断分類である。

臨床的には身体因を伴わない身体的機能障害(転換ヒステリー)と精神的機能障害(解離ヒステリー)に分類される。転換ヒステリーの症状には、ヒステリー球、卵巣痛、ヒステリー弓、感覚脱失、視野狭窄、ヒステリー盲・聾、叱声、麻痺、失立、失歩、けいれん、限局性頭痛などがあげられる。解離ヒステリーには、健忘、せん妄、空想虚言、記憶障害、もうろう状態、昏迷、仮性痴呆などがあげられる。

DSM では転換ヒステリーは身体表現性障害、解離ヒステリーは解離性障害(解離性健忘、解離性遁走、解離性人格障害、離人性障害など)に相当する。

##### 4-2．ギリシア・ローマ時代のヒステリー

もともとヒステリーはギリシア語 Hysteria = 子宮に由来し、子宮は性交を行っていないと乾燥してしまい、さまざまな身体症状を引き起こすと考えられていた。ヒポクラテス Hippocrates はその著作「婦人病」で、特に年配の女性の子宮は軽いので「(子宮の)窒息」πνιξ(プニクス)が生じやすいと書いている。女性が疲労していて、内臓に隙間があると、子宮は乾燥し、水分を求めて上方に移動する。この子宮が肝臓に当たると子宮の窒息が起こり、今まで何ともなかった女性が突然白目をむいて、体が冷たくなり、顔面蒼白となる。歯を食いしばって、よだれが流れ出し、いっけんでんかん発作のようにみえる。また子宮が肝臓以外の臓器にぶつかることもあり、これによって不安、めまい、嘔吐、頭と首の痛み、下肢の冷感、失声など多彩な身体症状を引き起こす。

プラトン Plato は「ティマイオス」の中で魂をヒエラルキー化し、最も高い位置に脳の中にある不死の魂があり、次に胸の中に男性的な魂があり、内臓の下にさがるほど魂のない動物に近くなると考えた。これによれば子宮は子どもをつくりたいという欲望にとりつかれた動物のようなものであり、不妊状態においてさまざまな障害を生み出すのである。



ローマ時代のガレノス（Galenos 131 - 200）はヒステリーを子宮の充血が原因で局所的に窒息が生じる病と考えた。またヒステリーを嗜眠型、窒息型、運動型の3種に分類した。

#### 4 - 3 . 中世のヒステリー

中世のヨーロッパでは精神医学は衰退し、ヒステリーにみられるさまざまな身体症状（スティグマ）が悪魔つきとして説明されるようになり、多くのヒステリー患者が魔女として火刑に処せられた。イスラム世界ではギリシア・ローマ医学の影響を受けて、ヒステリーは体液説に基づいて黄胆汁が原因で生じると考えられた。

#### 4 - 4 . 19世紀末のヒステリー

18世紀になると、イギリスのジェームズ・クレイハムが磁気は神秘的な治癒力を持つとして、ロンドンに奇妙な神殿を建て、医療的に用いた。うさんくさい面もあるが、宗教を離れて、暗示や催眠的なものが心因的な不調の治療に用いられた最初の例である。

1778年、アントン・メスメルがパリで磁気療法・催眠療法を始め評判となった。メスメルは宇宙を満たす磁気を帯びた液体の流れが人体に影響を与え、人間の内部でこの液が調和を保つと健康であり、不均衡となるといろいろな病が生じると考えた。メスメルはバケと称する奇妙な機会を作り、その周りに人が手をつないで輪を作り、磁気杖で患者にさわること、発作を起こしたり治療したりした。

フランスのナンシーで開業していたリエボーはメスメリズムを心因性の疾患をもつ人々に応用し、こうした疾患が暗示によって治癒することを示した。彼の教えを受けたベルネームは催眠療法を完成させた。

パリの内科医であるブリクは1859年に430のヒステリー症例について臨床的に詳細な観察を行い、「ヒステリーの臨床的治療的特徴」を著した。

また神経学者のシャルコーは1882年に、サルペトリエール病院の神経学教室の初代教授となると、催眠療法を取り入れ、優秀な弟子を輩出し、サルペトリエール学派を形成した。弟子の一人であるバピンスキーはヒステリーを説得によって治癒可能だと主張し、ヒステリー心因説の基礎を作った。

パリのジャネは、夢遊状態から交代制の多重人格に至る心的現象に注目し、解離の概念によってその心的機序を明らかにした。

この時代の代表的なヒステリーの定義は以下の通りである。「精神動揺が異常にたやすく速やかに精神生活全体に影響するだけでなく、感覚脱失や異常感覚や、表情や身振りや、麻痺や痙攣や血管運動障害や腺分泌生涯などの様々な身体症状をもたらすこと（Krapelin 1915）

#### 4 - 5 . 精神分析とヒステリー

精神分析の創始者フロイトは、プロイアーとともに「ヒステリー研究(1895)を著し、ヒステリーの病因として心的外傷を考えた。ハイジの出版された1880年はヒステリー研究の有名な事例であるアナ・Oの治療が開始された年でもある。

フロイトは心的外傷理論を推し進め、両親から受ける性的な外傷体験がヒステリーの原因となるのではといったんは考えたが、後にそれを放棄し、患者が告白する親から受けた性的な外傷体験は、現実の出来事ではなく、患者の無意識的な願望であるとするエディプス・コンプレックス理論に到達した。

#### 5 . ハイジ ~ネグレクトと夢遊病~

##### 5 - 1 . ネグレクトされたハイジ

ハイジのメインのケアテイカーは母親アーデルハイト、母方の祖母とデーテ、ウルゼルばあさんとデーテ、アルムおんじ、ロッテンマイヤ女史とゼーゼマン家の使用人たち、ふたたびアルムおんじとめまぐるしく変わっている。ハイジの持っている基本的な健康さから推測すると、母親や祖母からの養育関係は安定していたものと思われる。しかし、母親とも祖母ともハイジは死別してしまう。ハイジは当時1歳であったから、両親の相次ぐ死はハイジの記憶には残されていないが、両親の悲劇的な死は間接的にハイジにも知らされ、心理的に大きな影響を与えただろう。両親の死によってハイジは祖母とデーテに預けられる。祖母とハイジの関係については小説には記載はないが、ウルゼルばあさんのようなマイナス要因があるにもかかわらず、ハイジがペーターの祖母にみせる優しさをみると、よい養育関係があったものと思われる。祖母の死はハイジが4歳の時のことだから、今度はハイジの記憶にも残っているはずである。ハイジがペーターの祖母が死ぬかもしれないと言う不安を口にしているのは、この実の祖母の死の影響が大きいと思われる。フランクフルトで死んでいくおばあさんの物語を読むとハイジは、「ああおばあさんが亡くなった」と叫んでむせび泣き始める。また、フランクフルトからデルフリ村から戻ったときも、「わたしがいないうちに、死にはしなかったかしら」とおばあさんの安否を気にしている。対象喪失を経験した子どもが、自分に原因があると責めるのもよくあることである。ハイジはどこか、自分のせいでペーターの祖母が死んでしまうのではないかと空想し、不安になっていたのかもしれない。盲目のおばあさんには、大人に迷惑をかけないように静かにしていなければならなかったハイジ自身姿が重なっているのかもしれない。ともあれ祖母の死によって、ハイジは自分の欲求に対してはまったく無頓着なウルゼルばあさんやデーテに身をゆだねなければならなくなってしまった。

アニメの第2話で、ハイジがウルゼルばあさんに預けられていたころの夢を見るシーンは象徴的である。画面は白黒で、ゆがんでおり、耳の遠いウルゼルばあさんにハイジは話しかけるが、ウルゼルばあさんには聞こえず、ばあさんは自分の保身のためハイジが外に出ないことだけを注意

し続ける。画面は一転して原色のアルプスの自然へと切り替わり、ハイジの解放を象徴的に表現するのである。このシーンはハイジが受けているネグレクト型の児童虐待を象徴しているようである。

物語の最初でデーテに連れられて登場するハイジは「まるで真冬のように、厚着をして」いて、「暑そうに、くるしそうに、山をのぼって」行く。いっけんすると厚着は子どもを保護するもののように見えるが、この場合はあきらかにハイジ自身の持っているニードとはずれてしまっている。デーテは新しい靴を買ったり、靴下を繕ったり、むしろハイジに手をかけているようである。しかし、ハイジが「暑い」といっても、まったく無視してしまい、ついにハイジは買ってもらった靴を「いらないの」と脱ぎ捨ててきてしまう。

後に詳しく述べるが、ハイジは他人の要求に非常に敏感である。耳が聞こえず、さらに老齢であるウルゼルばあさんの猜疑心にあわせなければならなかったとすると、ハイジの敏感さも納得できる。ゼーゼマンと初対面の時、ゼーゼマンがハイジに席をはずさせようとして「水をくんできておくれ」とたのむとハイジはわざわざ外の井戸まで水を汲みに行く。

フランクフルトの教会の塔にのぼらせてくれと塔守に頼んだときは、断られても自分の要求を主張できたが、ロッテンマイヤ女史にアルムに帰りたいと主張するときは、我慢に我慢を重ねた末、ようやく言ったときには、「燃えるような目つきをして、体をふるわせていた」という記載がある。自分の保護者的な立場にある人に対するハイジの自己主張の難しさが非常によく表れているシーンである。

## 5 - 2 . 夢遊病としてのハイジ

ハイジはフランクフルトで都市生活を過ごすうちにホームシックから夢遊病となってしまう。ハイジは毎晩同じ夢を見て、夢の中でアルムに帰っているが、実はそのときゼーゼマン家の中を歩き回っているのだった。また夢遊病とまではいかないが、アルムに戻ってから楽しみにしていたクララの訪問が延期になったことをお医者様に知らされた時も、放心状態になり、目の前にお医者様がいることも忘れてしまう。ハイジの母親のアーデルハイトは体が弱く病弱であり、「ときどきおかしな症状を起こして、眠っているのか、さめているのかよくわからないことがあった」というから、ハイジのこのような素質は母親から受け継いだものといえるだろう。

Krapelin ( 1915 ) によれば大人のヒステリーはいくつもの症状が多重的に現れるのに対して、子どものヒステリーは症状が単一であり、特に夢遊病は子どもに現れやすいという。

ハイジに限らず夢遊病をとりあげた文学作品は多い。シェイクスピアの「マクベス」でもマクベス夫人が夢遊病となり、自ら犯した犯罪の光景を夜な夜な再現するシーンが有名である。またクライストの戯曲「ハイルブロン少女ケートヒエン ( 1808 ) には、眠っているはずの主人公ケートヒエンがケートヒエンのしたう男性と会話をかわす場面がある。

### 5 - 3 . 都市の病としての夢遊病

アルプスの自然からフランクフルトの都市生活へなじまなければならなかったカルチャーショックの問題が、ハイジの夢遊病にも大きな影響を与えている。作者のシュペーリがヒルシェからチューリヒに出た時に感じたカルチャーショックがここには反映されていると考えられる。しかし単なるカルチャーショックというだけでなく、都市生活そのものがアイデンティティの多重化を促す働きがあるものと考えられる。農村生活の生活と仕事为一体となり、共同体の中での生活が前提とされる中では、アイデンティティの分裂といった状態は想定しにくい。都市生活で仕事と家庭が別になり、人が異なる社会の中で同時に生きようになり、人口の流動による個人の匿名化が生じる中で「二重人格」という症状が生み出されるように思う。ハイジも、ロッテンマイヤ女史からは本名のアーデルハイトと呼ばれ、また使用人からは「お嬢様」と呼ばれ、「いま、わたしには、三つなまえがあるわ」と嘆いている。

これは、スチーブンスンの小説「ジキル博士とハイド氏」(1886)の解離現象としての二重人格でも明らかである。この作品の舞台はロンドンであるが、ジキル博士/ハイド氏のモデルとなった市議員にして盗賊であったディーコン・プロディはエディンバラの出身であった。

フランクフルトの歴史を振り返ってみても、都市としてのアイデンティティの模索の途上であったといえる。もともとフランクフルトは中世では商業のさかんな自治都市として栄えた。1866年のプロイセン-オーストリア戦争でオーストリア側について破れ、その結果プロイセンに併合された。1870年の普仏戦争の結果、1871年にドイツ帝国が成立し、工業と交通の年として発展していった。1871~1914年にかけては人口が9万人から45万人へと激増している。「ハイジ」の書かれた1880年は戦争の余韻がまだ残るあわただしい時期であったと考えられる。

このような都市の拡大期にロートシルト(ロスチャイルド)家のようなユダヤ人商人が富を蓄えていったのである。ちなみに「アンネの日記」で有名なアンネ・フランクもフランクフルト出身である。

もともとスイスはアルプスという交通の要所に発生した連合都市国家という性格があり、傭兵制度への国民の積極的なコミットなど、おんじのように姿をくらし別の土地を流浪するというようなことが起こりやすかった土地である。ハイジは非常に現代的な症状にとりつかれたとっていいだろう。

### 5 - 4 . 罪悪感へのとらわれ

ハイジは両親と祖母の死に対して、自分に原因があるのではないかと思いこんでいても不思議はない。精神分析的に言えば、ハイジの中には強い超自我が自己非難をしやすい状態になっているのだ。アルムに戻りたくなり、ゼーゼマン家を出てしまったハイジにロッテンマイヤ女史は「恩知らず」と叱責した。このような罪悪感を駆り立てる言葉にハイジは非常によく反応してしまう。アルムに帰りたいといえば、ゼーゼマンもクララもクララの祖母も、ロッテンマイヤ女史のよう

に怒るだろうと思って、ハイジは一人部屋で声を殺して泣くのである。アニメ版ではロッテンマイヤ女史がハイジに「山のことを思い出しても、考えてもいけない」と禁止したことが、ハイジの夢遊病の直接のきっかけとされている。つまりアニメ版ではロッテンマイヤ女史が超自我の役割をより強く担っているのだが、それに反応してしまうのはハイジの性格形成の影響も大きいのである。

ハイジには相手が自分に親切にしていくくれるのは、自分が相手の意向に添っているからだという考えがしみついている。従って、信頼できる関係があっても、そこで本当に自分が思っていることは告げられないのである。

クララがアルムに来られないのをお医者様から知らされたときも、自分が一時的な解離状態になるほどショックを受けているのにもかかわらず、お医者様が悲しそうにしているのを見ると、たまらなくなってしまう、「そうよ、もう少し待てば春よ。春になればきっといらっしゃるわ。そして、もっと長く、とまっておいでになれるわ。クララも、きっとそのほうがいいでしょう」とぎゃくにお医者様を慰めた。

またお医者様がアルムを尋ねて、フランクフルトに帰らなければならなくなったときも、「わたし、これから、いっしょにフランクフルトにいきます。そして、先生がおっしゃるあいだは、おそばにいます」とあれほどいやだったフランクフルトに戻ると口走ってしまう。これがハイジの「素直さ」「純真さ」として読者に感動を与えるところであるのだが、一方で良くない結果が予想できても、その場での他者への気遣いが敏感すぎて犠牲になってしまうハイジの傾向を表しているといえる。お医者さまならば、ハイジの申し出を断ってくれるが、デーテの場合はそこに付け込んで置き去りされてしまうのである。

## 6．転換ヒステリーとしてのクララ

### 6 - 1．クララの「病氣」

クララは「やせて青白い顔」をし、「やさしい青い目」をした12歳の女の子である。片足が麻痺しているために車椅子に乗っている。体も衰弱しているようで、調子のよいときにほんの少し馬車で散歩に出かけることしかできなかった。主治医のお医者様の意見によれば、クララの病氣は回復する見込みはなかった。お医者様が行っている治療らしきことといえば、肝油を飲むことを勧めるくらいのものである。アニメでは「わがままなお嬢様」的に描かれているが、原作では楽しみにしていたアルム旅行が延期になっても、父親を思いやり、不満ひとついうわけでもなく涙をこらえる「いい子」である。

クララの麻痺の正式な病名は原作には記述されていない。おんじの素人リハビリによって回復することから考えると心因性の転換ヒステリーである可能性が高い。クレペリン(1915)によればヒステリー性麻痺でもっとも現れやすいのは体の半身だけに生じる片麻痺である。またヒステリー麻痺で困難になるのは特定の運動行為であり、個々の器官の作用ではない。いかにおんじが

リハビリを行っても、もしクララが一度も歩いたことがなかったのなら歩行にはかなりの時間を要したはずである。おそらくクララの麻痺は失立失歩状態であったのだろう。失立失歩はブロックによって最初に詳しく記載されたもので、純粋な例では両足の運動性や力は全く障害されない。患者は臥位ではあらゆる運動が可能で、歩行運動も力強く性格に行える。それに反して立とうとするとたちまち力無く崩れ落ちてしまい、一歩も歩くことができないのである。

## 6 - 2 . クララの家族力動

幼い頃に母親を亡くし、父親のゼーゼマンは商人として忙しく家には不在がちである。そこから来る罪悪感からか、ロッテンマイヤ女史には「どんなことにも、むすめの考えをきいてくれ、そのいやがることは、なんにしてもはいけない」と言いつけた。母親代わりのロッテンマイヤ女子は情緒的反応に乏しい人で、厳しく、融通が利かない。クララに対しては過保護的で、すぐに体の悪さに結びつける傾向があった。クララが家庭教師の先生の退屈な授業であくびでもしようものなら、「体が弱くなった」からといって、すぐに肝油を出してきて飲ませようとするのだった。

つまり「いい子でないこと」＝「体が弱いこと」であり、過保護の対象となる。しかもそこには肝油（この当時は我々がイメージする肝油ドロップではなくて、サメの油をそのまま飲ませる）という罰のニュアンスが込められていた。ロッテンマイヤ女史はクララを自分の保護のもとに置こうとする一方で、「病気のクララのお相手をすることが、ときどき重荷になることがあったから」ハイジを呼ぶことを考えついたのである。ロッテンマイヤ女史のクララへの態度は非常にアンビバレントである。（ロッテンマイヤ女史の章で述べるが、おそらくはゼーゼマンの関心を巡るクララとのライバル関係が原因とであろう）

フロイトによればヒステリーの症状は象徴化によって無意識のメッセージが込められているという。例えば失声という症状ならば、「話したくない」というのが患者の無意識のメッセージとすることになる。その比喩に従えば、クララの麻痺、失立、失歩という症状は「自分の足で立ちたくない」＝「自立したくない」という比喩とすることになるだろう。その一方で自分の力でできないために生じる退屈さにうんざりもしていたクララの前に現れたハイジの意味は大きかった。クララもハイジも「いい子」になってしまっ、自分を押さえてしまうというところは似通ったところがあったが、ハイジはほとんど社会的な体験というものをしていなかったから、自然にロッテンマイヤ女史の求める枠組みからはずれていってしまった。しかも、クララの生活するフランクフルトの家から抜け出すという自立のモデルを提供したのだった。

アニメ版ではクララが歩けるようになる前に、ペーターのおばあさんに本を読んであげて感謝され、初めて人に何かをしてあげる喜びを知るというエピソードが挿入されている。「ヒステリー研究」で取り上げられた事例アナ・Oが、後に社会福祉家のベルタ・パッペンハイムとして世に知られることになることを思うと、興味深い改変といえよう。

## 7. ヒステリー症例としてのロッテンマイヤー女史

### 7-1. 情緒的な興奮しやすさ

ロッテンマイヤー女史は、ゼーゼマン夫人が亡くなってからゼーゼマンの家の家政をとって、すべてのやとい人を監督しており、みなからおそれられていた。「情緒動揺が異常にたやすく速やかに精神生活全体に影響する」というクレペリンの「ヒステリー」の定義は、「ハイジ」の登場人物中では彼女に最もあてはまるだろう。ゼーゼマン家に野良猫を持ち込んだハイジを見るとロッテンマイヤー女史は「叫ぼうとしましたが、あまり興奮したので、声が出ませんでした」とヒステリー性の失声状態になった。またその事件の後も「ロッテンマイヤー女史は、興奮から冷めませんでした。ハイジは、なんとひどいむすめだろう、だまされた、という気持ちが、いつもいつも胸にうかんできました」と、非常に興奮しやすく、しかもその興奮がさめにくいことが記載されている。

### 7-2. 对人的操作性

ゆうれい騒ぎの時に、一番怖がったのはロッテンマイヤー女史だった。アニメではクララが何かが起こっていることに気づきロッテンマイヤー女史を問いつめて、ゆうれい騒ぎのことを知り、怖がって父親であるゼーゼマンを呼び戻すことになっている。ここではロッテンマイヤー女史の関わりは受け身的である。

原作ではまずロッテンマイヤー女史がゼーゼマンに自宅に戻るよう手紙を書くのである。しかし、ゼーゼマンは、帰宅せず代わりにおばあさまに相談することを勧めた。しかしおばあさまは真剣に扱ってくれない。それで、ロッテンマイヤー女史は子どもたちが怖がることを承知でクララとハイジにゆうれい騒ぎのことを告げる。さらにゼーゼマンにこのまま放置するとてんかん舞踏病がおこるかもしれないとおどして、ついにゼーゼマンを自宅に呼び寄せるのである。

またクララを怖がらせ、ロッテンマイヤー女史がクララの部屋で寝ることにするが、これも実は一人で寝たくないのはロッテンマイヤー女史であることが推測できる。

### 7-3. ファンタジーと現実との解離

またクレペリン(1915)はヒステリー患者の想像力について「想像力の激しさのためしばしば白昼夢の傾向が現れる」と書いている。ロッテンマイヤー女史の想像力も、白昼夢とまではいれないがかなりのものだ。彼女がクララの遊び相手としてスイス娘を選んだ理由をゼーゼマンに述べるシーンでは、「わたくしは、それはスイスのむすめがよろしかろうと、考えました。これまで、いくども本で読みましたとおりの、きれいな山の空気の中に生まれて、言ってみれば土にもふれずに育ってきた、そういう子をお屋敷にいれたいと願っておりました」「あの、よく話にも出てくるような、高い清らかな山地に生きていて、さながら、理想のまぼろしのように、わたくしたちの前を歩く、そういったような子を求めたのでございます」と言って、ゼーゼマンから「土に

もふれずといっても、空中をとぶわけではあるまいに」とたしなめられている。こうしたファンタジーの中のスイス娘は、明らかにロッテンマイヤ女史自身の理想の女性像ともいえるだろう。そこにみられる娘のイメージは純血無垢で、少なくとも表面上は禁欲の固まりであるロッテンマイヤ女史の女性イメージを表しているように思える。

#### 7 - 4 . 症例「ルーシー嬢」

フロイトとプロイラーが「ヒステリー研究(1895)」で取り上げた女性も、知的で感情的・性的には未発達なロッテンマイヤ女史に似通っている。なかでもルーシー嬢の症例は男やもめの家庭に母親代わりとしてはいつているという共通点がある。ちなみにロッテンマイヤ女史とルーシー嬢の「女史」と「嬢」はともに Fraulein の訳語である。アニメで見るとロッテンマイヤ女史は中年のおばさんとして描かれているが、年齢はもっと若い可能性がある。ルーシー嬢の症例の概要は以下の通りである。

30歳の独身女性であるルーシー・R嬢は、イギリス出身でウィーンで母のいないふたりの女の子の住み込みの家庭教師として働いていた。使用人たちとの関係がうまくいけなくなり、家庭教師を辞めてイギリスへ帰るかどうかが悩んでいるときに、嗅覚がなくなり、その代わりに奇妙なおいがるという症状に苦しめられるようになった。実は彼女は男やもめの主人(すなわち子どもたちの父)に片思いの恋をし、この気持を無理に断念していた。彼女の訴える奇妙な臭いとは、実は、この男やもめの主人の吸っていた葉巻の臭いや、恋をあきらめて故郷へと思う気持ちにかられたときにかいだ、焦げたブディングの臭いなのであった。

ルーシー嬢は、子どもの母親代理として家庭に入ったのだが、その役割を果たしているうちに主人の妻の役割まで果たしたいと思うようになったのだ。使用人たちに対する敵意の裏には、主人に対する恋心を知られたら、馬鹿にされるのではという気持ちが隠されていた。また貧しい出自である自分と主人の身分の違いに対する劣等感が与えた影響も大きい。そして分析の最終段階でルーシー嬢は、遊びにきた若い夫人が子どもたちの口にキスをするのを止めなかったと主人から叱責されたことを想起した。それは、ルーシー嬢が主人との親密な交際を夢見ていたのを覚まさせられるようなショッキングな出来事だったのだ。これが奇妙な症状の形成された背後にあったものであった。

#### 7 - 5 . エディプス・コンプレックス

ルーシー嬢の症例を参考にもう1度ロッテンマイヤ女史の状況を見てみると、確かにロッテンマイヤ女史はゼーゼマンに対して自分を特別扱いしてほしいと期待するのだが、その思いははねつけられてしまう。ゆうれい事件があった後、ロッテンマイヤ女史は、ゼーゼマンが自分だけに



は夜中にあった出来事を教えてくれるだろうと期待していたが、ゼーゼマンはロッテンマイヤ女史を無視して、クララにだけ説明をする。

使用人に恐れられているという記述をみると、気の強さや信念という印象を受けるかもしれないが、裏ではロッテンマイヤ女史は依存的で自信のない部分を、ゼーゼマンだけでなく年上の男性に支えてほしいところをかいまみせている。たとえば、ハイジがゼーゼマン家で問題を起こすたびに家庭教師の先生に自分の不満をきいてもらい、先生からハイジがこの家に止まるのはよくないと言わせようと画策するのである。またお医者様に対しても特別な敬意を表している。お医者様と玄関ですれ違おうとした時、風が吹いてロッテンマイヤ女史がお医者様の方にとばされ、お医者様がよけるというエピソードがある。ロッテンマイヤ女史はいらいらして興奮してしまうが、お医者様を見ているうちに優しい気持ちになり、その後は普段であれば不機嫌になりそうなハイジへのおみやげの荷造りを頼まれても上機嫌でとりくむのである。

しかし年上の男性とのいわば父・娘ポジションにはいりやすいことが、おそらくロッテンマイヤ女史の結婚の障害にもなっているのだろう。

女性の登場人物が少なくて目立たないが、女性とのライバル関係もいくつかみることができる。特にクララのおばあさまに対するけむたさは随所に現れている。おばあさまがくるときでも「あまりうれしそうでは」なく、「たとえこれからべつの勢力が現れようとも、自分の勢力だって、まだ消えはしないぞ、といっているようでした」「老婦人が自分をよぶときには、いつも名前をよぶだけで、それに「さん」という敬称をつけてくれないことが、ロッテンマイヤさんには、嫌な気がしていました」すくなくともロッテンマイヤ女史のファンタジーの世界ではゼーゼマン家の奥主人は自分であると感じられているようである。

ほとんどの時間を自分の部屋で過ごすクララにとって、ロッテンマイヤ女史は母親がわりといってもよく、クララの性格形成にも大きな影響を与えているものと思われる。クララの足の麻痺は忙しすぎる父親からの愛情を得るための試みとして性愛的なニュアンスを帯びているが、このようなクララの傾向のモデルとしては、ロッテンマイヤ女史の影響が大きいものと考えられる。

## 7 - 6 . ロッテンマイヤ女史の予後

クララが自分の足で歩き始めることは、ロッテンマイヤ女史にとっては依存対象をなくす危機的状况となるだろう。クララが目の前で歩くのを見たゼーゼマンはクララによく似た母親を思い浮かべて、クララを抱きしめる。そこにはもはやロッテンマイヤ女史のはいりこむすきはなし。しかし、長い目で見ればそれはロッテンマイヤ女史にとっても必要なプロセスなのだろう。シュピーリのように文筆面にその才能をいかしてみるのもいいかもしれない。

## 8. まとめ

私たちが何となく子どもむけの話ととらえている「ハイジ」にも、時代の抱えるところの問題が反映されている。むしろクララとハイジの病理はその当時のヒステリー理論をさらに進めた解離と心身症という問題を提示しているように思える。新たな読みによって、現代的なストーリーとしてのもうひとつのハイジに再会してもらえれば幸いである。

## 文献

- Caplan, G. 1961 An Approach to Community Mental Health, Tavistock, London (加藤正明・山本和郎訳 1968「地域精神衛生の理論と実際」医学書院)
- Freud, S. & Breuer, J. 1895 Studien über Hysterie, Deuticke (懸田克躬・小此木敬吾訳 1974「フロイト著作集7 ヒステリー研究他」人文書院)
- Henri F. Ellenberger 1970 The Discovery Of The Unconscious, Basic Books (木村敏・中井久夫監訳 1980「無意識の発見」弘文堂)
- 石井厚 1999 古代ギリシア・ローマの精神医療 松下正明編「臨床精神医学講座 S1 精神医療の歴史」, 67-78, 中山書店
- Krapelin, E. 1915 Psychiatrie, Johann Ambrosius Barth, (遠藤みどり訳 1987「精神医学3 心因性疾患とヒステリー」みすず書房)
- Spyri, J. 1880 Heidi's Lehr- und Wanderjahre, F. A. Perthes (竹山道雄訳 1952「ハイジ(上) 岩波書店)
- Spyri, J. 1881 Heidi Kann Brauchen, Was Es Gelernt Hat, F. A. Perthes (竹山道雄訳 1952「ハイジ(上) 岩波書店)
- 加藤政明他編 新版精神医学事典 1993 弘文堂
- 高橋健二 1972 シュペーリの生涯 彌生書房
- 高山智津子 1989 「ハイジ」100年の旅 清風堂書店
- Trillat, E. 1986 Histoire de L'hystérie, Seghers (安田一郎・横倉れい訳 1998「ヒステリーの歴史」青土社)
- 矢川澄子 2001 「ハイジ」は実は現代的な物語なのです ~120年前の物語「ハイジ」の現代に通じる魅力~ MOE, 6月号: 18-19
- 山田和夫 1999 神経症の治療史 松下正明編「臨床精神医学講座 S1 精神医療の歴史」中山書店